



ウンコマン

9月24日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

9月24日のおはなし「ウンコマン」

日本でも大きな町ではガーディアン・エンジェルとかいう舶来ものの自警団が活躍しているそうだが、わたしの住む竜田町ではなかなかそう垢抜けた感じにはいかない。それでも最近になってだんだん治安が悪くなってきたので、竜田商店街の青年部でなんとかしようということになった。でも、わたしたち商店のおっさんたちがいきなりガーディアン・エンジェルとか言っても、急に金髪のカツラをつけて外人のふりをし始めたみたいでみっともないし、かといって自警団と言うと殺伐とする。

そこで戦隊もののユニフォームをマネして、客寄せイベントをやりつつ、実はまじめに治安維持にも取り組むということになった。その名もドラゴン戦隊タツレンジャーである。言い出しっぺはわたしが、あくまで「例えばこんな感じ」というので言っただけの名前で、ドラゴンとタツがかぶっているのが気になっていたのだが、青年部ではノリがいいということで一瞬で採用になってしまった。わたしが赤タツレンジャーでリーダーをつとめているのはだいたいそういう理由なのだ。

平日の夜に5人で集まって、土日のイベントの練習をする。つたないながら、わたしが台本を書き、セールをかける店舗の情報を必殺技の名前に折り込みながら、最終的には敵役をやっつける。敵役といっても、そのためにいちいち金をかけて特殊メイクとかするわけにはいかないので、不景気マンとか、怪人・フシンシャーとか、妖怪・万引き小僧とか、まあそんなのを相手に戦うわけだ。不景気マンならこてんぱんにやっつけて追い出したり、フシンシャーや万引き小僧なら改心させたり、という具合。

* * *

「断りもなしにかっこつけとるんやないでワレー！」

というのがその男の発した第一声だった。けばけばしいスーツ。濃い茶のサングラス。下手に触ると瞬間的に爆発しそうな、むき出しの刃物ののような異常なオーラを発しまくっている。赤タツレンジャーのタイツをはくわたしの手は止まってしまった。事務所のメンバーも全員凍りついた。せっかくこれまで暴力団は敵として扱わずに来たのに、それでも因縁を付けられてしまうのか、といろいろ考え始めたとき、男の表情が変わった。

「ウンコマン」その言葉が目の前の人間凶器のような男の口から飛び出した。「ウンコマンやないかい」

それは、小学生の時のある忌まわしい事件のためにわたしにつけられたあだ名である。この年齢になって人前で暴露されようとは。

「おれや。クボタや。竜田第2小の」

「クボタ.....クボタか！ 久しぶりやな。どないしとってん」

クボタは中学卒業まで同級生だった。小柄でいつも敵意むき出しだったクボタとは小学校の頃からのつき合いだ。小学校の頃は仲も良かったのだが、中学にはいるとクボタはだんだん学校に来なくなり、かろうじて卒業はしたものの、そのまますぐに地元の組関係の構成員になって、すっかり疎遠になっていた。組の若頭をやっているという噂は聞いていた。そのクボタだったのだ。わたしが何者かわかると途端にクボタは表情をやわらげ、いろいろ話し始めた。ウンコマンのエピソードまで暴露しやがった。

「悪かったんやで、この赤タツレンジャーは。おれなんかよりよっぽどキレやすかったんや。小学生やのに二人でようつるんで悪さようけしよったんや。ほんでな、いっぺん近所の中学の悪ガキどもに囲まれてもうて、シメられそうになったことがあってな」

わたしたちは無謀にも真っ向から闘いを挑み、もちろん二人ともボコボコにやられた。クボタはたぶん肋骨を折られ、わたしも立ち上がれなくなってから何度も腹を蹴られ完全に戦意を喪失

していた。そのときあいにく腹を下していたわたしは下痢をもらしてしまい、その瞬間に切れたのだと思う。あとは何がどうなっていたか覚えていない。気がついたらわたしは誰かの上に馬乗りになっていて、下には口のまわりに下痢を塗りたくられ顔中あざだらけになって泣きながら謝っている大将格の中学生の姿があった。クボタは茫然と脇に立っていた。以来そのあだなをつけられたのだ。

「余計なこと言いくさって」

「ええやないか。めちゃくちゃ強かったんやで」

クボタは、これからタツレンジャーに文句言うモンはおれがシメたる、と宣言し、意気揚々と帰っていった。文句を言いに来たのはおまえやないか、と言いたかったが、さすがに黙っておいた。ずいぶん勝手な話もあったものだ。それからクボタとわたしは時々会って酒を飲む仲になった。これは暴力団と癒着したことになるのだろうか。

* * *

青年部に「クボタが襲われている」という連絡がはいったときも、わたしはタツレンジャーの出番に備えて準備を終えたところだった。聞けばどこから来たかわからない集団に不意打ちを食らってボコられているということだった。まわりからは止められたのだがわたしは「友だちを助けられんで何が正義の味方や」と威勢のいいセリフを叫んで飛び出したらしい。らしい、というのは、よく覚えていないからだ。どうやら何十年ぶりにキレたらしい。

気がついたらわたしはクボタを介抱していた。クボタを助け起こそうとして、ものすごい激痛を覚え、わたし自身指の骨が折れているらしいことにそのとき気づいた。まわりにはもう誰もおらず、誰が勝って誰が負けたのかもよくわからなかった、でもわたしは指の骨折以外はそれほどダメージをうけた様子ではなかった。

「おまえめっちゃ強いなあ」クボタが言った。「うちの組にはいらへんか」

「あほか」わたしは答えた。「おれは正義の味方や」

そのあとしばらくクボタは咳き込み、痛みに顔をしかめた。また肋骨を折られたらしい。涙をぼろぼろこぼして痛がりながら、それでも何かをどうしても伝えたいらしく苦しい息の下から必死になって声を絞り出す。

「ウンコマン……」

「わかってるて」

まるでチンピラ映画の感動的なラストシーンだ。でもクボタは別に死ぬわけでもないし、これはどこにでもあるただの乱闘であって、何か守るべき者のためにすごい闘いを終えたわけでもない。

「ウンコマン……」

しかもセリフは「ウンコマン」だ。

「やかましわ、ウンコマンウンコマン言うてから」

正義の味方もつらいのである。

(「ウンコマン」 ordered by ヨウス-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

ウンコマン

<http://p.booklog.jp/book/34407>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34407>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34407>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.